

尹東柱「序詩」の 日本語訳をめぐって

韓 哲曦

(青丘文庫代表)



『同志社時報』から尹東柱についての執筆依頼があつて、何を書こうかと想っている時に、蔵田雅彦氏から手紙が来た。彼も私も全く未知の坂内宗男という人からの突然の手紙と、一九九五年一〇月三一日付『朝鮮日報』のチョ・ヒョンギュンという人の投稿文のコピーが同封されていた。坂内氏から私への申入れなので、よろしくお願いしますとのことであつた。

投稿記事の要旨は、同志社大学構内に建立された尹東柱詩碑について、一〇月二三日付紙面で知り喜ばしく思った。しかし日本語訳として刻された「序詩」の伊吹郷訳は、原詩とはほど遠い誤訳であり、朝夕ゆきかう人たちに無心で読まれていると思うと痛惜に堪えないのであつた。

ハリス理化学館西庭に建てられた詩碑は、右側に原詩を、左側に伊吹郷訳が刻まれている。

死ぬ日まで空⁽¹⁾を仰ぎ

一点の恥辱⁽²⁾なきことを、

葉あいにそよぐ風にも

わたしは心痛んだ。

星をうたう心で

生きとし生けるものをおしまねば

そしてわたしに与えられた道を

歩みゆかねば。

今宵も星が風に吹きさらされる。

チョ氏は(1)は物理的な空でなく、

彼の純粋な信仰からみて「天」と訳すべきであり、(2)は恥辱と訳すのは、当時の

の圧制者の侮辱を受けることを避け、一身の無事安全を祈っていると受けとられ

る。尹の真意を歪曲した訳で、(3)は原

詩をあまりにも審美主義的に訳している

と批判している。坂内氏も同意見であり、

『死ぬ日まで天を仰ぎ』が、日本基督教団

出版局から出たので早速一読した。冒頭

の森田進訳は大幅改まっているが、改め

られた理由が書かれていないのはなぜ

か、というのが第一、第二に詩碑建立推

進者の韓にこの点を伝え、すでに同志社

大学に問題提起しているのに無音なの

で、韓にブッシュしてほしいこと、第三

に、金錫得延世大学副総長の話では除幕

式直後に、伊吹氏と誰かが激論していた

というが、詳細を韓から知らせてほしい

との手紙であつた。同志社を代表するわ

새로 온 길

너를 건너서 숲으로
 고개를 넘어서 바늘로
 어제도 가고 오들도 갈
 나의 길 새로운 길
 문들려가 되고 까치가 날고
 아가씨가 지내고 ^{장바} 람이 알고
 나의 길은 언제나 새로운 길
 오들도...! 내일도...!
 너를 건너서 숲으로
 고개를 넘어서 바늘로

(一九三八.五.一〇.)

尹東柱自筆の「序詩」原稿

けではもちろんないが、名ざしで記されていたので早速坂内氏に電話した。第一と第二については『同志社時報』で韓が見解を記すことをもって応答と受取られたい。また森田改訳理由は前掲書中の「尹東柱、そのキリスト教性」の森田氏の文章で詳述されており、十分読んでおられないのではないかもっと熟読されたい。またその文中にあるように伊吹訳「生きとし生けるもの」については、除幕式の日の午後、新島記念会館でのシンポジウムで、韓国側から問題提起があり討論されたようである。しかし除幕式直後は、韓の文中に記されたように、突然のあられ雪で急遽チャペルに移動しており、伊吹氏と誰かとの激論など全くなかった。シンポジウムでの討論が誤り伝えられたものと思われる。坂内氏は早速のお答えを頂き感謝します。『同志社時報』が出ましたらお送り願えれば幸いですとのことであった。

ところで一〇月三十一日付の前記投稿に対し一月四日付『朝鮮日報』にチョ・ヒ Chol 青山学院大学非常勤講師の反論が掲載された。(1)の「空」はキリスト

教的な「天」だけとか、物理的な空だけを意味せず、広い意味での「空」であると思われる。(2)の「恥辱」には、はじと振り仮名をふってあり、日本語としては恥と同じ意味である。(3)伊吹訳を「すべて生命あるものを」と韓国語で誤訳して批判している。伊吹訳こそが原詩の深い意味を把え表現したものだと思う。尹東柱の全詩を訳し普及させ、日本での尹の足跡を刑事・検事を含め多くの人や、すみずみまでも尋ね歩き明らかにした功績は大きいと記している。穏当な文章である。

ところで今まで「序詩」のこの部分はどう訳されていたのであろうか、一九七四年から二二年間多くの訳がなされたが、いま私の手もとにあるものだけを列記してみると、次のようになる。

No.	発表年	訳者	書名	①	②	③
①	一九四〇	宇治郷毅	抵抗の詩人尹東柱 (季雨、まだん、二号)	空 恥じる	空 恥	空 恥
②	一九五〇	鄭 敬謨	「詩人空河の世界」 「世界」九月号	天 恥	天 恥	天 恥
③	一九五五	大村益夫	「抵抗の空にはくも思慕 金花(鄭敬謨と鄭) 尹東柱」	空 恥	空 恥	空 恥
④	一九六〇	素雲	「現代韓国文学選集」 編訳 朝鮮の抵抗文学	天 羞	天 羞	天 羞
⑤	一九七六	金 学鉉	「空・風・星の詩人」 「荒野に呼ぶ声」	空 恥すべき	空 恥すべき	空 恥すべき
⑥	一九八〇	金 学鉉		天 恥すべき	天 恥すべき	天 恥すべき

⑦	一九三三	伊吹純一郷	「記録 三九号」	空 恥	空 恥	空 恥
⑧	一九四〇	伊吹郷	「空と風と星と詩」	空 恥辱	空 恥辱	空 恥辱
⑨	一九六四	金 贊汀	「抵抗詩人尹東柱の死」	空 恥	空 恥	空 恥
⑩	一九六五	森田 進	「死ぬま天を仰ぎ」	天 恥	天 恥	天 恥
⑪	一九六五	宇治郷毅	同書	天 恥	天 恥	天 恥

(1)は「空」が六人、「天」が五人であるが、宇治郷毅、金学鉉が「空」から「天」へ変えているので、実質八人中五人は「天」と訳していることになる。

(2)は「恥」「恥じる」「恥ずかしさ」「恥ずべき」「羞いらい」とほとんどが「恥」であるが、伊吹だけが「恥辱」と辱の字を入れている。

(3)はほとんどが「死に行(ゆ)く」で、金贊汀が「逝く」、伊吹が「生きとし生ける」と訳している。伊吹は一九八二年には「恥」「死にゆく」と訳していたのを、八四年には「恥辱」「生きとし生ける」と変えている。相当の理由があつてのことと思われるが、どこにもその解説はなされていない。この訳書『空と風と星と詩』のもとになった『記録』に「三回にわたって連載された多くの詩には解説がついていた。変更の理由は察するに難く

はないが、批判もされている此際、改訳の理由を明らかにされてはどうかと思われる。

私自身は「天」「恥」「死に行く」と訳す。「序詩」原文の真意にそつて素直に訳せばそうなると思つている。しかし森田氏のように詩集の題名を『天と風と星と詩』とは思わない。私にとつて尹東柱の詩を一貫して流れる中心的キーワードは、「空と風と星と詩」と思っているからである。

なおチヨ・ヒョンギン氏や坂内氏に望みたいのは、伊吹訳全詩集が出版されて一〇年余を経ている。批判も結構であるが、是非とも協力して『尹東柱全詩集』の新訳を出されることを心より望んでやまない。

ライフリンク (命の輪)

山口良子

(中学校教諭)



昨夏、スウェーデンで国連五〇周年の公式行事の一環として行われたライフリンクのコーディネイター会議に七月三一日から八月三日の日程で参加する機会を得た。会議の行われた場所はシグチュナボーディングスクール。シグチュナはスウェーデン・ストックホルムから車で四〇分ほど北上したところにある美しい古都で、北欧のおとぎ話の絵本そのままの家々が緑と湖にかこまれて並んでいた。

ライフリンク(命の輪)は、人類の未来について影響を与えるチャンスを持つ十代の若者が地球・人類の平和な未来を築いていくために話し合い、世界中にフレンドシップスクールのネットワークをつくっていくこうとする組織で、議長はハンス・レヴァンデル医師。彼はウプサラ大学病院の内科のドクターでIPPNW(核戦争防止のための国際医師の会)の会員でもある。

八九年以来、二年ごとに夏にスウェーデンでライフリンク・ユースセミナーが開催されてきており、世界の状況変化にそって、重点が、地球環境問題・人権などにおかれるようになってきている。

九二年には六〇か国から七〇〇以上の学校がリサイクル、エネルギー、交通、有毒物質や水質問題などの調査研究の活動に参加している。

八九年にハンス議長が広島訪問の後、同志社中学校で生徒たちと話し合いを持たれたことがきっかけで交流が始まり、九二年には私が第二回ライフリンク・ユースセミナーに参加、九四年の第三回同セミナーには同志社大、京大の学生(含・同中卒業生)数人が参加している。

今回(九五年)の会議はコーディネーター(世話人)の会合で、テーマは「学校間のネットワークづくりと国際間の安全保障」、参加者は一九か国から四五人。主な内容は、①ライフリンクと国連、②ユネスコとグローバルセキュリティ、③安全保障を医師の立場から考える、④コミュニティセキュリティ等の講演、イギリスやスウェーデンの中高生からの発表、コンピュータによるコミュニケーションの理論と実習、学校間のネットワークづくりの実践交流——国際環境デー・人権・水質検査などでの世界各地の共同の取りくみ——水質検査実習など、スウ



STATEMENT ON SCHOOL-TWINNING



YOUTH COMMUNICATION AND COOPERATION FOR HUMAN AND GLOBAL COMMON SECURITY

LIFE-LINK CONGRESS REPORT
SIGTUNA SWEDEN 1995

エーデン文部省、ユネスコ、ノルドネット、スウェーデン王立アカデミーの科学者が参加協力していた。

今回参加した会合で特に印象に残ったことにふれておきたい。

(1) スウェーデンでは「国連五〇周年」が政府、文部省レベルでもしっかりと位置づけされており、今回のライフリンク会議でも各国大使の参加があり、スウェーデン政府のサポートがあった。

(2) この会議への参加に際し、私自身、日本から出発する前に国連の歴史と役割をあらためて学び直していった。ユネスコ本部の代表、シーグリードさん（とても素敵な行動力ある女性で数か国語話せるドイツ人で、現在はパリ在住）から、じかに国連のこと、ユネスコの現実のはたらきをくわしく聴くことができ、国連の役割を見直した。

ユネスコでは、④人権・民主主義・寛容 (Tolerance)、⑤相互文化理解、⑥環境教育などを中心に活動しているが、特に⑤の点で学校間を結び取り組みの具体例として、①南北の交流支援計画、②バルティック海沿岸の国際プログラム、③

困難な条件におかれている学校のネットワークづくり計画などがある。

このような取り組みのベースには八九年の「暴力に関するセビリア声明」や、「子ども」の権利条約があるので、ユネスコでは世界各国にこれらの内容をわかってもらえるように情報提供しているとのことだった。中等教育むき（中高生にもわかってもらえるように）のパンフレットも各国に送っているとのことだったが、少なくとも私自身の手元にはそのような資料は公式ルートからは届いていないし、「暴力に関するセビリア声明」に関しては、日本では、まだよく知られていない。「子ども」の権利条約にしても、子どもたちが、その本当の意味を理解していくのは中々むずかしいのではないか、今の日本の学校教育の根本からの見直し、発想の転換をしない限り、道は遠いのではないかと感じている。

(3)まず私たち自身が「セビリア声明」や「子ども」の権利条約」を真に学び、子どもたちにわかるようによくこなし文章で知らせ、具体的な行動を通して体得していけるように子どもたちを励ますこ

とが大切だと思う。

(4)八月一日、ウプサラ大学のラーシユ・ライデン教授の「コミュニケーション・ユリテイ」の講演の後の討論で、「セキユリティをおびやかす最大のものは核兵器」との立場で日本からの発言をした。

この会議が「ヒロシマ・ナガサキ五〇年」も視野に入れた企画だったので日本からいくつかの資料を準備して持って行った。視覚に訴える絵本『広島原爆』（福音館）をはじめ中学生用英文教材『君はヒロシマを見たか』『ほたるの墓』（三友社）等を示し、五〇年後の今でも日本では被爆者が苦しんでいる現状を説明した。

フランスの核実験直前だったこともあり、参加者の関心は高く、会期中ずっと一〇冊ほどの本や資料は食堂に展示して皆が読めるようにしてほしいと頼まれ、十分に活用され、個々にも質問され話し合うことができた。

(5)なぜ学校間を結ぶこと（School Twinning）が必要かの話し合いのまとめとして、①世界のことをもっと知る、②言語を学ぶ機会、③異文化にふれる、

④本当の責任をおうチャンス、⑤若者間の協力、⑥自己評価するチャンス、⑦じかにその国の人、状況にふれることができる、⑧Staring（分かち合い）、⑨身体的な移動は心が動き変化していくことにつながる等の項目があげられた。

ヨーロッパでは地域的に近いこと、言語（英語）でのコミュニケーションがとりやすいことなどから国境を越えての深まりのある交流が盛んに行われている。アジアでは、どのような形で共同の取りくみ、交流ができるのだろうかと考えさせられた。

会議後、八月六日のウプサラでのヒロシマ・デーにぜひ参加してほしいとの強い要請をうけて、急拠ウプサラへ向かった。八月五日、ウプサラ着。リンネ植物園、ウプサラ大学横の市民墓地にハンス議長の家内で訪れた。美しく手入れされ花にかこまれたダグ・ハマーシヨルド第二代国連事務総長の墓前にひざまづき、小学生の頃、新鮮な気持ちで学んだ国連のこと、ハマーシヨルド事務総長の第二次大戦後の世界平和にむけての活躍、日本国憲法のことを思い出していた。



寄宿舎の中庭にて



会議の休憩中に
シエラレオネの青年と話し合う

八月六日にはヒロシマ追悼の各集会（朝・教会の日曜の集い、午後・ウブサラ市民の集い、夕方・ヒロシマ追悼ミサ—ウブサラ大聖堂で厳肅な中、無伴奏で『死んだ女の子』を私が歌うことに—夜九時・ヒロシマ追悼の灯籠流し—これはウブサラ川で八二年から毎年行われているという。数百名が参加）に参加した。

ストックホルムアピールの地、平和学のすぐれた研究・実践の国スウェーデンの一端にふれる思いがした。

今回ライフリンクの会議には二回目の参加だったので以前からの友人にも会い、これまでのつみ重ねがさらに深まり発展していくだろうというきっかけをつかむことができた。

この会への参加を勧めて下さった英語科の同僚で昨秋急逝された豊田勝儀先生及び、この会への参加を認めて下さった同志社国際主義教育委員会に心から感謝している。

同志社は誰のもの

第一回英学校卒業式をめぐる



本井康博

(大学文学部嘱託講師)

創立当初、アメリカン・ボードの宣教師たちは京都の男子校を「同志社」と呼ばずに、常に「トレニング・スクール」（神学校）と呼称した、との伝承が、ひろく伝搬している。が、ミッシェンの側からいえば、「誰の」トレニング・スクールであるのか、という点こそ大きな争点であった。

たとえば、神戸のO・H・ギューリックである。彼は、開校当初から京都の学校を「ミッシェン・トレニング・スクール」と呼ぶのは間違いで、「新島氏の学校」と呼ぶべきだ、と主張する（一八七六年二月二日付書簡）。

D・W・ラーネットも証言する。「この学校は、ミッシェンが理想とするトレニング・スクールには程遠いとの思いが、ミッシェン内の一、二の者にたえずありました」と（一八七九年一月一日付書簡）。二人とはギューリックと大阪のH・H・レヴィットとを指す。

前者は、同志社があまりにも日本人の主導性が強すぎる、つまり宣教師軽視の学校であると見なし、後者は逆に日本人の主導性が弱すぎる、すなわちミッシェ

ンの支援を仰ぎすぎる学校と見る。その結果、一方は同志社（神学科）を神戸へ移転させ、宣教師主導の純粹な「ミッシェンの」トレニング・スクールにせよと主張し、他方は大阪へ移転させ、日本人が経費をすべて負担する完全自給型の「日本人の」トレニング・スクールに改組すべき、と主張する。

さて、興味深いことにこのギューリックの不満を爆発させることになるのが、英学校の第一回卒業式である。晴れの式典の場が同時に激しい論戦の場となったのである。これは一体、どういうことか。

「昨日は京都トレニング・スクールにとってまさに歴史的な一日」とラーネットが伝える式典には、十五人の卒業予定者のうち、名前は不明であるが、一名が欠席した。十四人の演説のあと、「卒業生総代」（日本語の式次第では「離別ノ詞」）の伊勢時雄が別離の挨拶を述べた（一八七九年六月一三日付書簡）。

次いで、日本語の式次第には掲載されてはいないが、山本寛馬が「青年たちに激励の言葉を短く述べた」。さいごに新島校長が式辞を述べた後、卒業証書の授与

をした。「阪神から大勢の日本人〔信徒〕が参加したばかりか、「京阪神に在住する」ミッシェンのほとんどの者が列席しましたので、普段はチャペルとして使用している、いくぶん狭い部屋は満員で、人で溢れかえりました。大勢の者が入り口や窓から中をのぞき込んでいました」(同前)。

式場は、毎朝の礼拝で使う「第二寮」の階下が使用された。二つの教室を合わせたとはいえ、百人前後を入れるにはあまりにも狭すぎた。この会場の狭さが、先述のプログラムとともに後日、大きな問題になるうとは誰が予想しえたであろうか。ちなみに、この年(一八七九年)の末までに同志社は独立したチャペル(木造)と体育館とを竣工させており、翌年の卒業式は新築の体育館で挙行されている(一八八〇年七月三日付ラーネッド書簡)。

さて、論戦の発端は、卒業式のもち方にギュエリックがつけた激しいクレームであった。

「宣教師の教師たち『三名』には式典でなんの役割もありませんでした。新島氏

と山本〔寛馬〕氏とは学校の理事として演壇に上りましたが、宣教師の教師たちは日本の学校のお雇い教師扱いと同じで会衆の中でした。それは府庁や学校に関係する日本人たちの「妬み」が原因で、とりわけ前者の知事は「ユダヤ人に急ぎ立てられたピラト」同然である。京都では財産所有権のないミッシェンが、京都の学校に投資した二万ドルの不動産をそうした「嫉妬深い」知事ひとりの手に委ねるのは実に危険である、という(一八七九年一月一三日付書簡)。

彼の言いたいことは、すでに前便でも述べられていることであった。

「前便で、京都の学校のことを『私たちのトレーニング・スクール』として話すのは間違いで、新島氏の学校として論じたり、記述したりする方がボードやその支持者に対して報告するのにより正確である、と申し述べました。」

これを受信したアメリカン・ボードの幹事、N・G・クラークはその返信に「今年の年次報告を作成するにあたっては、同じミス进行するように努力します。学校を直ちに新島氏の学校と呼び、今後とも

そうするつもりです」と記す(同年九月一日付書簡)。どうやら、ギュエリックの投じた一石は、ポストンの本部をも巻き込む勢いであった。ただ、クラークはレヴィットに対しては返信の中で「京都の事業への批判は残念。彼らはよくやっている」と同志社を弁護している(一八八〇年一月八日付書簡)。

ところでギュエリックは聖書の授業禁止や財産所有権の欠如などの点で同志社にはかねてから批判的であったが、加えてこの夏、いくつかの事が重なった。M・L・ゴードンの住宅を校地内に建築することを山本寛馬から拒否されたこと。京都女学校(同志社女子校)のミス・スタークウエザーに何の相談もなく(この点は彼の誤解で、後に謝罪して訂正)宮川経輝の同校就任が決定したこと(同年二月八日付書簡)。さらに、その宮川がスタークウエザーを無視して女学校(寮)の部屋割り等を断行し始めたこと。いずれもミッシェンには「屈辱的」な事柄であった。女学校の支配権をめぐるも男子校とまさに同じ問題が発生、と見るわけである(同年一月一三日付書簡)。

ギューリックはポストン宛ての先の私信を日本ミッシヨンのメンバーにも回覧した。

これに対して、ラーネッドは、彼の見解は「間違いだらけ」、との反論をポストンに書き送った(同年二月五日付書簡)。彼によると、式場が狭かったために演壇もひとりがいせいで、という大きさで、新島とラーネッドとがそれを挟む形で演壇の側に座った。同僚のJ・デイヴィスは来賓の接待で多忙であった。校長の新島が卒業証書を手渡し、山本覚馬が祝辞を述べたが、後者はまったくデイヴィスの勧めによったものである。「これを見て、外国人教師が冷遇されたと見るか、それとも日本人を持ち上げ過ぎたと見るかは、貴方には明白ですね。デイヴィス氏と私とはもっと目立つべきだったと幾分、思います。もし私たちが間違っていたおれば、それは私たちのミスか、控えめ過ぎたかのどちらかです。それにしても、これがこの学校の外国人教師には力や影響力が全くない、という現れの典型と見なされた「実態な」のです。」

デイヴィスもまた、九項目を列挙して、

ギューリックの「誤解」を反駁する。「新島氏は二、三度、式典での役割を私に頼み、しきりに勧めてくれましたが、私は断りました。「中略」演壇も六フィート平方しかありません。宣教師のほとんどはできるだけ演壇の近くに座った。山本も会衆席だし、自分の提案である彼の登壇は新島や山本には予期せぬ事であった。それにギューリックに言われるまで、宣教師の出番が少ない理由が日本人の「嫉妬」や「敵意」にあったとはまったく予想もしなかった、等といった具合である(同年一月二〇日付書簡)。

ギューリックも負けてはいない。自分は宣教師が式典の役割をもつべきだった、と主張したのではなく、歌を何曲か歌つたり、「新島氏の要請で」閉会祈禱をしたほかは、宣教師の役割が皆無であったことは百人前後の参加者には明白であった、との事実を主張しなかった。「それに「演壇は当日、十七人が乗れるほどの広さが十分にありました。」たとえ会場に演壇が全くなかったとしても、問題は残ったはず。要するに学校の「最終的な管理」がどこにあるのか、それを示したか

つたのだ、と(同年二月八日付書簡)。つまり要点は同志社を誰の学校と見るのか、どう呼ぶのか、の問題である。ちなみにラーネッドは「英語でこの学校をどう呼ぶかは、比較的にささいな事だと思えます。京都トレニング・スクール」あたりが最善でしょうが、この学校が真のトレニング・スクールであるかどうかは、別の問題です」と言う(同年二月五日付書簡)。

しかし、ギューリックにしてみればポードの機関誌である『ミッシヨナリイ・ヘラルド』の一月月号には『京都トレニング・スクール』との表現が五回も出て来ます。そういうふう呼びたい誘惑は、実に強いようです」となる(同年一月一三日付書簡)。

かくしてギューリックは「新島氏の」学校にあくまでも反発し、「ミッシヨンの」学校、すなわち「ミッシヨントレーニング・スクール」を神戸に創設するためにこの秋、本部に六千ドルの予算を請求したい、との陳情におよぶのである(同年一月二三日付書簡)。

同志社香里に おける人権教育

山田正夫

(香里中学・高等学校教頭)



「これが人権教育です」と一言に述べることは至難の業です。ある一つの事柄をことさらに取りあげて人権教育が存在するのではなく、それは宗教教育や同和教育とも関連し縦横に絡めながら多角的に求めねばなりません。同志社ではキリスト教主義をもって徳育の基盤としていることから、生徒諸君は礼拝や聖書の授業を通じて隣人愛の精神を学ぶことができます。また、同和教育からは部落差別問題や在日外国人、障害者問題等によってマイノリティーの人々を差別から守ることについて考え、人権や福祉についての関心と理解を深めることができます。しかしながら、人権教育は単に学ぶことではなく、知識と実践が併行して進められたときにはじめて実りあるものとなるのです。それは、人権ポスターの掲示、パンフレットの配布、文章化する教育活動、講演、啓発映画、課題図書、H・R討議等の様々な啓発活動を数多く展開することに加え、募金活動やその他ボランティア活動、あるいは日常の生活や学習を通して得た体験によって築き上げられるものでしょう。人権教育の原点は、その心

を育てることにあります。人権教育が学内において隅々にまで浸透したとき、いまだ大きな社会問題となっている「いじめ」の問題等も自ら解決されることであると信じて疑いません。

本校の人権教育は未だ確立されたものではなく手探りの状態です。いま手懸けていることや今年度実施した事例をここに紹介することにより課題の一端を担うことができればと考えています。

○生徒・保護者・教職員がすすめる釜ヶ崎ボランティア

今年度の釜ヶ崎ボランティア体験には、保護者の方々が七月一三日、生徒諸君は八月二一・二二日の両日、炊き出しや「援助物資の整理」に参加しました。参加者は三〇名を越えて年々広がりをみせています。また、今年度もPTA活動の一つとして「ひと握りの献米運動」が実施され、昨年と同様の約七〇〇kgの献米が釜ヶ崎に搬入されました。

○ユネスコ学校キャンペーンへの参加

この運動は児童・生徒に対し国際理解や国際協力の精神を培うことを目的としています。本校でも全学一致して取組む

こととし、毎年継続することとなっております。

なかでも「世界寺小屋募金」は宗教委員の生徒達によって実施され、今年度は五五、二〇二円を贈ることができました。また、大阪ユネスコ協会の第四二回「国際理解、国際協力のための主張コンクール」には高校三年生五名が応募してくれました。さらに、ユネスコ寺子屋書き損じハガキを大阪にイメーτζ化する方針のもとに進められている「書き損じハガキの回収」にも協力することとなりPTA新聞により呼びかけているところです。

○ユニセフ・ハンドインハンド募金への協力

ユニセフは、ほぼ半世紀にわたり人道的理由のために活動が行なわれ、人々による人々のための機関として知られています。

本校でもユネスコと同様に「次代を担う子どもを守り、その成長を助けるほど価値ある投資はない」という観点に立つて、その能力を高めるための募金活動に生徒を中心に参加しています。毎年実施

される「全国一斉の募金キャンペーン」ハンドインハンドには、今年度も生徒二一名（生徒会・自治会役員、宗教委員、高三有志）と教職員四名が参加し、一時間のうちに四三、六四六円を集めることができました。

○第四三回中学生人権作文コンテストに応募

法務局及び大阪府人権擁護委員連合会がこのコンテストを実施し、第二次審査を経た八十編の作文から作者の主張とみられる「光る言葉」が抽出されました。それは「中学生の意見集」として編集される運びとなり、本校からも中学一年生四名、二年生一名の文章が選ばれて「光る言葉」として紹介されることとなっております。

○WHO協会全日本中学生作文コンクールに応募

日本WHO協会では「ともに携えて私達の責任を果そうではありませんか」ともに語り合いました。今回のテーマには「からだの不自由な友とともに」が題材として設定されていきましたので本校

中学生としては絶好の課題となり（本校中学には両上肢欠損症の障害を持つ宮本圭君が頑張っている）九編の優秀作品を送ることができました。

○第九回中学生平和意識アンケートへの参加

朝日中学生ウィークリーが毎年実施されている調査ですが、戦後五〇年という大きな節目の年の調査は大変注目されていたと聞いています。本校からは中学三年一組の生徒全員がこのアンケートに答え、そしてその調査結果は各H・Rにおいて平和・人権教育の格好の材料となりました。戦後五〇年にあたり、過去の戦争の歴史を学び平和について考えることはいま、とても大切なことです。

○朝日新聞特集「ヒロシマ・ナガサキ被災五〇年」の活用

これは日本新聞協会の「教育に新聞を」の一環として四面にわたり紙上掲載されたものです。これには被爆の傷跡、投下目標、マンハッタン計画、原爆症等が詳解され、同時に映画、演劇、書籍等が数多く掲載されています。本校ではこの特集を八〇〇部いただき、高二の修学旅行

(長崎)の事前資料として、また社会科の授業資料として有意義に活用することができました。

○第四七回人権週間への取組み

この取組みは同和委員会を中心に準備されH・R講話をもって実施します。教職員には強調事項の主旨を配布し、各学年において対応していただきました。

今年の中一と中三が障害者問題、中二が平和問題といじめの問題、高一と高二は同和映画「エイジアンブルー」について、そして高三は民族差別について実施されました。

○生徒と教職員も出演した同和映画「風の中のスクラム」

この映画は大阪市人権啓発推進協議会からの依頼により本校でロケが行なわれました。これは、「同和問題をはじめとする人権問題解決の道筋を考える」をテーマに全国各地から応募された演劇ストーリーの優秀作品「ノーサイド」が映画化されたものです。

この同和映画「風の中のスクラム」は、ラグビー部の部活をめぐる揺れ動く青春の群像を描きながら、差別の問題を真正

面から取り上げる青春ドラマです。三中旬テレビ放映されると同時に本校にもフィルムが寄贈される運びとなっています。

紙面の都合上すべてを書くことはできませんが、その他「花の日礼拝」の献花やクリスマス献金、文化祭模擬店の収益の一部による福祉施設等への支援の活動は例年のことです。

生徒諸君の心の奥底に知らず知らずのうちに築き上げていく人権教育は新島精神にも合致するものです。

一人一人の教職員が人権教育の意義を理解し、意識の高揚を図り、一丸となつてこれに取組めたとき、それは急速度で進展し、そして確立されることでしょう。

「平和を実現する人は幸いである」

マタイによる福音書第五章九節

文学研究科美学および芸術学専攻博士(後期)課程、経済学研究科「高度専門職コース」、商学研究科「ベンチャービジネス・プログラム」を開設

大学院改革がすすむ中、96年度には同志社大学では3つの研究科で新しい課程やコース、プログラムを開設する。

▼文学研究科の美学および芸術学専攻は博士課程後期課程を開設する。企業メセナや地方公共団体での芸術文化振興が盛んに行われている昨今だが、この研究科では、現代の複雑化した芸術現象を総合的に把握できる、創造性豊かな研究者や指導的役割を果たせる人材の養成を目指している。(※文学研究科事務室 ☎075・251・3360)

▼経済学研究科応用経済学専攻では「高度専門職コース」を設置する。このコースでは、社会人、留学生、新卒者を対象

(75ページにつづく)